パラリンピック選手ら招きシンポジウム

身近な存在 共生の一歩

「ともに。～私たちにできること」をテーマにしたシンポジウムが10月14日に文京シビックホールホールで開かれ、こども記者は出演者に質問しました。

写真家の越智貴雄さん

前川楓選手（パラ陸上）

太田渉子選手（パラテコンドー）

山田拓朗選手（パラ競泳）

知ることで世界広がる

越智貴雄さんはパラアスリートを撮っている写真家です。僕は越智さんが撮った2012年ロンドン・パラリンピック大会の車いすバスケットボールの写真が好きです。「パラアスリートの一人一人の個性を表現するために、どのようなことを意識していますか？」とお聞きしました。越智さんは「知ることで世界が広がる。その知ることはどこから知るかが大切。視点が変わることで右だと思い込んでいたことが実は左だったということもある」と答えてくださいました。思い込みをしないで新しい視点を持つという大切さを教えてもらいました。越智さんの写真は越智さんのホームページから見ることができます。車いすバスケット選手のクモの糸のような手の動き、床についた車椅子の車輪の跡をぜひ見てください。

【中１／久保壮太郎】

ロンドン・パラリンピック（2012年）で撮影した越智さんの写真
©越智貴雄／カンパラプレス

選手を応援、楽しむ

第1部では、パラリンピックについてパラテコンドーの太田渉子選手、競泳の山田拓朗選手、陸上の前川楓選手の3人のパラリンピアンと写真家の越智貴雄さんが登壇しました。

4人は一つ一つの質問に丁寧に応じました。太田選手は、海外と日本のパラリンピックや選手のあり方の違いとして、2010年のバンクーバー・パラリンピックの際に人々がオリンピックとパラリンピックの両方を同じように認識し応援する雰囲気があったことや、パラリンピックだけではなくオリンピックにも出場している選手もいることを挙げていました。

山田選手は「パラリンピックでのメダルについて、競技をすることやメダルを取ること自体が共生社会につながるわけではありませんが、パラリンピックで選手が活躍し、メディアを通して障がいを持っている人がたくさんいることを多くの人たちに知ってもらい、身近に感じてもらうきっかけになればよい」と答えてくださいました。

東京大会を控えている中で、オリンピックとパラリンピックは確かに異なる部分もありますが、「スポーツ」という共通の柱を中心にそれぞれの特徴を知り、両方の大会が同じように身近な存在として注目されてほしいと感じました。そして、観客やサポーターとしてパラリンピックでの選手のパフォーマンスを応援し楽しむことが共生社会の実現のための一歩になるのではないかと思いました。

【大３／編集サポーター・橋本薫】

積極的に声かけを

陸上の前川選手は、「同じ障がいでも、義足の使い方や、使っている義足自体がちがいます。だから、魅力がみんなちがうといえるので、東京2020パラリンピックではそこに注目してほしいです」と話しました。義足で走ろうとすると、ひざ折れといってひざがガクンとなってしまい転ぶため、その恐怖とたたかって、義足で走れるようになったそうです。

障がいのある方をより多くの人に理解してもらうために、私たちはどのようなことをすることが大切かを聞いたところ、山田選手は、「普通に接してくれれば良いが、日本は外国と比べてハード面は恵まれているが、声かけが少ないので、声かけをしてくれるとありがたい」と話してくれました。私は選手や越智さんの「知ることにつきる」という言葉を聞いて、私たちが障がいのある方のことをもっと知るには、障がいのある方が外に出やすい環境をつくり、障がいのない方とふれあう機会を増やすことが大切だと思いました。このシンポジウムでもいろいろなことを知りました。また新聞でも障がいについて多く取り上げることで、他の人にも知らせることができると思います。日本は他の国と比べて声かけが少ないそうなので、誰かが困っている時には助けられるようになりたいです。

【小６／石井たまき】

21年度 こども記者･編集サポーター募集

取材し記事に 写真も

文京区オリンピック・パラリンピックこども新聞は、2021年度の新規のこども記者と編集サポーターを募集します。

こども記者は、取材して記事を作成する文京区の小中学生の方、編集サポーターは、こども記者の取材や編集のサポートを行う15歳から24歳までの方です。それぞれ取材や写真撮影に取り組み、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会や文京区の魅力に興味をもってもらえるよう、タブロイド版のオリンピック・パラリンピックこども新聞を作ります。発行は年２回を予定。新聞折り込みのほか、区施設にも配布されます。

取材の仕方、質問のコツ、記事の書き方､写真の撮り方などは研修で学びます。また、取材では研修で学んだことを生かして質問をしたり、現場の様子が伝わるような写真を撮ったり、自分なりに工夫しながら記事を書きます。ぜひお申し込みください。

こども記者＆編集サポーターは、登録申込書を郵送または直接提出してお申し込みください。

登録申込書は４月１日よりスポーツ振興課（シビックセンター17階北側）にて配布、または区のホームページよりダウンロードできます。

※最終申込締切日：６月末必着
※登録証の発行には、申込書受領後３週間程度を予定しております。
※申込受付開始：４月１日

2020大会 魅力伝えよう

参加上の注意

【こども記者】
①必ず保護者の方の同意の上、お申し込みください。
②取材にかかる交通費は、区が負担しますが、集合場所までの交通費は個人負担となります。

【編集サポーター】
①満15歳以上25歳未満の区内在住・在勤・在学者を対象とします。
＊18歳未満の方は、必ず保護者の方の同意の上、お申し込みください。
②取材サポート時は１日当たり500円の謝礼をお支払いします。
集合場所までの交通費は個人負担となります。

日本サッカーの軌跡

サッカーミュージアムを見学

こども記者は12月26日、日本サッカーミュージアム（文京区本郷３）に行きました。無料フロアの地下１階と有料フロアの地下２階を見学することができます。

たくさんのトロフィーに驚くこども記者

私は、文京区オリンピック・パラリンピックこども新聞記者として日本サッカーミュージアムを取材しました。2019年の来場者数は約4万人でしたが、20年はコロナの影響で10分の1の4000人だそうです。

見学した中で私が一番意外に思ったことは、選手だけでなく、監督や記者も紹介されていたことです。日本のサッカーが発展することができたのはいろいろな人の協力があったからだと思いました。

展示室に行くと、ピッチの芝生がついた状態のスパイクや、試合で使って汚れがついたボールが展示されていました。これは、来場者に試合の様子を想像してもらうためにやっているそうです。展示の工夫にのせた思いが伝わってきました。

また、日本サッカー協会の方になぜ日本代表のマークにカラスが入っているかを聞いたところ、「日本神話に昔の天皇の道案内をした八咫烏（やたがらす）という3本足のカラスがいて、烏は神聖な生き物となっているから」と答えてくださいました。そして、日本代表のマークの歴史をわかりやすく年表にしていました。

サッカーは、古代サッカーと現代サッカーに分かれています。古代サッカーの発祥地は中国で、サッカーボールは動物の皮を丸めたものの中に動物の毛を詰め込んでいたそうです。現代サッカーの発祥地はイングランドで、このころからルールが作られるようになりました。なぜなら、タックルをする人やボールを手で持ちパスする人がいたからだそうです。古代サッカーと現代サッカーに分かれるくらい歴史があるなんて、サッカーはそれだけ昔から多くの人たちに愛されているスポーツだと考えました。

日本サッカーミュージアムを通じて伝えたいことをスタッフにたずねると「日本サッカーミュージアムに来て、憧れの選手の物などを見て、サッカーにもっと触れてもらったり、夢を持ってもらったりするのが願いです」と声を弾ませていました。

【小４／小澤一葉】

ワールドカップトロフィーのレプリカについてしらべるこども記者

シャーレのレプリカ

地下１階に降りると、Ｊリーグ杯「シャーレ」のレプリカがあります。少し奥には日本サッカーの発展に貢献した「日本サッカー殿堂」の人の顔写真と説明がずらりとならんでいました。次に、地下２階の有料フロアを見学。まず目に飛び込んできたのは、青いユニホームを着て円陣を組むマネキンです。マネキンが着ているユニホームは、2002年男子ワールドカップで実際に使用されたものでした。しばらく進むと、ガラスケースの中に１足のスパイク（サッカーで使われるシューズ）が見えてきました。このスパイクは、元女子サッカー日本代表の澤穂希選手が、2011年ワールドカップ決勝戦で実際に使用したものです。使用した際に付いた土や芝などの汚れは、落とさずそのままです。

ほかにも貴重なものがたくさんあります。「サッカーを見ていない人にもサッカーミュージアムに来てもらって、サッカーに興味を持ってほしい」と案内をしてくれたスタッフは話していました。日本サッカーの軌跡をたどることができる、とても面白いところでした。

【小６／水島希】

選手の足形に足を乗せてみるこども記者

芝ついたままのスパイク

幸運に導くカラス

日本代表が外国のチームと初めて試合をしたのはいつでしょう。それは1917年５月９日で、この時の日本代表選手は選抜制ではなく、その時に一番強かった東京高等師範学校のチームが日本代表として出場しました。

またサッカー協会では、カラスはえんぎがよく、みちびいてくれる動物とされ、３本足だそうです。「日本サッカーミュージアム」ではこのようにいろいろなことを知ることができます。

【小４／本間柚菜】

降ってきた折り鶴

地下２階のフェアプレーというコーナーに驚くくらいのトロフィーが並んでます。フェアプレー賞は、ファウルが少ないこと、相手のチームを尊敬している態度などを認められた賞です。Ｆの形になっているのは不思議だと思ったけれど、フェアプレーのＦだとわかり、納得しました。このトロフィーをたくさんもらえる日本チームは、素晴らしいと思いました。

ワールドカップコーナーには、たくさんの折り鶴が展示されていました。2002年、横浜国際総合競技場で、ワールドカップの決勝戦のフィナーレに会場に降ってきた折り鶴です。全国の小中学生を中心に作られた折り鶴が約270万羽も集められたそうです。折り鶴が降ってくるのは、かっこいいと思いました。

地下１階のＪリーグコーナーには、優勝チームに贈られるシャーレのレプリカがあり、一緒に撮影することができます。シャーレは、直径55㌢、重さは約６㌔。14個の円があり、よく見るとサッカーをしている人などいろいろな絵が細かく刻まれていて､驚きました｡床には、たくさんの選手の足形がありました。ゴールキーパーだけは手形でした。足の大きさを比べたりして楽しめました。

自宅に帰りインターネットで検索すると八咫烏（やたがらす）の折り方が出ていたので折ってみました＝写真。

【小４／木村夏央】